

明日を語ろう!

北の農業人

KITANO NOUGYOUBITO



北海道農業に限りない愛情を注ぎ、
たゆまぬ努力を続ける人々がいます。
農業の未来を創造する「北の農業人」の
情熱や取り組みをご紹介します。



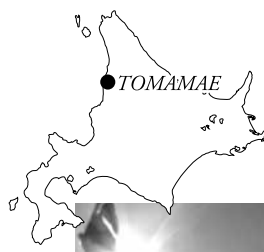
●農業の自立が地域を守る

地域連携型の農業生産法人という 新しい経営方式で注目を集める。 「必要なのは、柔軟な対応力と 一生学んで挑戦し続けること」

〔苫前町〕

有限会社無限樹 代表取締役

大川博文さん



自然体のままの土地が
おいしいものを育む

日本海に面した苫前町は、農林業と水産業を基幹産業とする人口4000人ほどの町です。対馬、海流の影響で、高緯度ながら比較的温暖。冬には強い季節風が吹き、海岸線に並ぶ大きな風車がランドマークになっています。農業生産法人「無限樹」の設立者である大川博文さんは、この苫前町で生まれ育ちました。「こつやつて農業ができるのも、自然のおかげ。自然に生かしてもらっている、自然に作らせてもらっている、という気持ちをもっと忘れてはいけません」と話します。



●日本海を一望する小高い畑では、大豆の収穫が最盛期を迎えていました。

大川さんが「無限樹」を立ち上げたのは、平成8年(1996年)のこと。減反政策や激変する食糧事情などを受け、このままでは日本の農業の未来がない。米農家の生きるすべもなく「もう」という思いから、新しい農業経営スタイルへの転換を決断。山間部に位置する三沢地区で、農業者12戸を組織して地域連携型の農業生産法人を設立し、水稲栽培だけに依存しない多品目栽培を推進してきました。

「ここでは余計な手を加えずに、自然のままの土地を生かして農業をしています。自然体でおいしいものができるということが大切なです。大川さんの言葉には、苫前町への深い愛情と誇りがにじみます。

農業がダメになるとき、
地域も崩壊する

大川さんは、本気で農業に取り組みのなから「生命の源にかかわる仕事、永遠に不滅の産産をやり抜くという自覚が必要だ」と言います。そうしたポリシーを貫く大川さんのもとには、全国から農業研修生や就農希望者が集まり、「無限樹」の経営スタイルを学んでいます。

大川さんはこれまで、北海道農業に対する危機感を訴え続けてきました。「農業は北海道の基幹産業。農業が破綻してしまえば、地域も破綻してしまう」。外国産の安い農産物が店頭に並び、安全性が保



●「無限樹」のスタッフや地元のパートさんたちが総出で、取り取った特別栽培契約の「すずまる大豆」を積み上げていきます。



●巨大なトラクターの前に立つ「無限樹」代表取締役の大川博文さん。「田舎で暮らすこと、苫前町という土地で農業ができることに満足している。人間が無理矢理手を加えたりせず、農業を続けられる環境があるからね」

証されない食べ物でも受け入れる風潮が、やがて自分たちの首を絞めることになる、と警鐘を鳴らします。「今は原点に戻る時代だと思ふ。自分は、北海道農業の異端児」と言われてきたけれど、同じことを続けるだけでは何も良くならない。自助努力をしないかなくちゃ。泥臭い農業と大川さんは笑いますが、「無限樹」は企業としてのビジョンのもとに、安定的な経営を図っています。そうした経営姿勢が高く

評価され、平成18年度土地改良事業地区「営農推進優良事例」で、平成7年度に続き再び農林水産大臣賞を受賞しました。

世界に「ただの花を
無限樹」の名に込めた思い

「無限樹」を支えているもの。それは、安心・安全な農産物を作ることができる基盤と

自主流通ルートの開拓です。農産物の大半が量販店や外食産業、消費者などとの直販で取引されています。食べた人の評価がそのまま販売実績につながる直販スタイルに、仲間の生産者からの関心も高まっているそうです。「直接、販売することで責任が生じる。いいところも、悪いところも、自分たちに跳ね返ってくる。農家にはそうした自主自立が大切」と大川さんは言います。

「農業ほど奥深い産業はない」と言い切る大川さん。農業とは何かと問われても「口では答えられない、何十年やってみてもまだまだ先がある。「無限樹」という社名には、そうした大川さんの思いが込められています。無限に枝を伸ばし、成長していく樹木のように、形にとらわれず、可能性に挑みたい。あえて漢字にしたのも、純国産にこだわる、という思いの表れでした。

「歌の歌詞じゃないけれど、農業を愛する人が無限樹という組織を母体にして、世界でオンリーワンの人生の花を咲かせてほしいね」



●新米が積み上げられた倉庫。大手の取引先だけでなく、食の安心・安全を求める個人消費者からも、電話やFAXによる注文が舞い込みます。



●「無限樹」では、水稲や大豆のほか、麦、キャベツ、メロン、カボチャ、イナゴ、トウモロコシ、ミニトマトといった多品目栽培を手がけています。こうした取り組みは収益性だけでなく、リスク分散のためでもある、と大川さんは言います。